| **症例****番号** | **実施年月日** | **1.実施施設** | **領域** | **1.来談者(クライエント)** | **1.遺伝診療／遺伝カウンセリングの内容****領域：周産期、小児、成人（腫瘍、神経、その他）、その他を記入** |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| **および時間** | **2.主指導者/他指導者** | **2.来談の理由・目的** | **2.実習から得られた学び／実習による学習事項** |
| **＜ログブック記載上の留意点＞** |  |  |  | **~~＜記載上の留意点＞~~** | **<１> 必ず、指定の書式を使用する。枠サイズ変更なしを推奨。****<２> 遺伝診療・遺伝カウンセリングの実習のみを記載する。****（遺伝性疾患以外のフォロー外来、産科外来、思春期更年期外来等は、ログブック記載の対象と****しない）****<３> 各ページ下、[　　]症例のカッコ内は必ず症例数を記載する。****<４>　指導教員の署名（印刷でない）が必要。****<５>　CGCのみによる遺伝カウンセリングは、現状では成されない。** |
| **通し番号.。同じクライエントは複数回でも****１症例として同一番号** |  | **１．実施施設****2．主たる指導者を一番上に記載、その他を改行して記載****（臨床遺伝専門医等。但し「指導医」の記載は不要）** | **欄上の****領域(6種)のいずれかを記載** | **１．主たるクライエントを最初に記載。来談者が複数の場合は全員記載する。****2．来談理由・目的を簡潔に記載する。** | **＃疾患名（人名は英語）****1. ・来談目的****・遺伝診療・遺伝カウンセリングの内容****・クライエントの様子****・次回の予定（今回で終了もあり）****2. 症例からの具体的な学びを記載（「陪席」「見学」のみは適切ではない）** |
|  |  |  |  | **＝記載例＝** | **~~＜記載例＞~~** |
| **記載例１**001 | 2022.3.145分 | □□大学病院遺伝子診療部△△臨床遺伝専門医〇〇CGC | 成人（腫瘍） | 1.30歳女性2．乳癌のリスクと遺伝の相談「発症前診断」 | ＃遺伝性乳癌卵巣癌症候群（HBOC） at risk 1.・自身の乳癌リスクや次世代の遺伝ついて心配している。クライエントの実母が36歳で右乳癌、40歳で卵巣癌を発症し、42歳で他界した。家系内の他メンバーにも乳癌罹患者が存在する。実母は遺伝学的検査を実施していない。・医師より、疾患および遺伝学的検査、家系内発症者に遺伝学的診断がついていない場合の検査の限界点について情報提供した。・クライエントより、自身および家族の健康管理に遺伝情報を役立てたいとの発言があった。・次回、クライエントの遺伝学的検査を実施予定である。2.・HBOCが疑われるが、*BRCA1/2*遺伝学的検査は実施されていない家系における、がん未発症者からの相談を見学した。遺伝学的検査が検討可能な関連癌の罹患者が生存していない場合に、がん未発症者における *BRCA1/2*遺伝学的検査の実施の留意点を学習した。 |
| **記載例２**001 | 2022.4.130分 | □□大学病院遺伝子診療部△△臨床遺伝専門医〇〇CGC | 成人（腫瘍） | 1.30歳女性2.検査結果の開示「発症前診断」 | ＃遺伝性乳癌卵巣癌症候群（HBOC） at risk 1.・医師は、*BRCA1/2*遺伝学的検査の結果、陰性でありHBOCは否定的であるが、他の遺伝性腫瘍の可能性はあることを説明した。・クライエントは、これまで通り乳癌健診を受けていくということに理解を示していた。2.・HBOCは否定的であっても家族歴から他の遺伝性腫瘍の可能性も考慮した対応が必要であることを学習した。 |
| **記載例３**002 | 2022.5.130分 | □□大学病院内科△△臨床遺伝専門医 | 成人（その他） | 1．25歳男性母親2.Down症候群（成人）の定期相談「定期受診」 | ＃Down症候群1.・本人は18歳から定期的に本外来を受診している。現在は退行様症状改善を目的としてアリセプトが処方されている。・母親は「最近、本人が内科処方薬を破棄していることに気が付き、錠剤が飲みづらそうにしている」と話した・薬剤部に錠剤を粉砕しても効能に問題ないことを確認し、本人が好きなアイスクリームに混ぜて服用する方法を試すことになった。・次回は、薬の効果測定と服薬状況について伺う予定である。2.・Down症候群の成人期における健康管理について理解した。また、薬剤の服用方法をクライエントと共に検討することも遺伝カウンセリングにおける支援であることを学んだ。 |
| **記載例４**003 | 2022.6.660分 | □□大学病院遺伝子診療部△△臨床遺伝専門医〇〇CGC | 成人（その他） | 1. 45歳女性2.娘の保因者診断の相談　「保因者診断」 | ＃Duchenne型筋ジストロフィー1.・クライエントは、15歳でDuchenne型筋ジストロフィーをもつ息子を亡くした母親である。長女20歳の保因者診断を希望している。・医師はクライエントが長女の保因者診断を希望する理由を傾聴した。長女の抱える問題の整理から開始し、実施の留意点や遺伝学的検査の進め方の方針を立てた。・クライエントは、家族内の罹患者と疾患を、長女に伝えるために資料を整理している。医師からの情報提供を書き留めていた。・1か月後に予約。いつ・どのように伝えるかを相談する予定である。2.・Duchenne型筋ジストロフィーの保因者診断について学習した。・検査対象となるクライエントの長女（罹患者の姉）は今回来談していない。クライエントから長女にいつどのように疾患や遺伝学的リスク、保因者診断の選択肢について伝えるかを具体的に検討する過程の大切さが勉強になった。 |
|  |  |  |  |  |  |